

「人種」の扉を開いた奴隷女セス
トニ・モリスンの『ビラウド』に見るレーシズム

半藤 正夫*
(平成 19 年 10 月 31 日 受理)

The Slave Girl, Sethe, Who Opened the Door of Race
_____ Racism in Toni Morrison's *Beloved* _____

Masao Hando*

Sethe, a pregnant and runaway slave woman, was helped in the deep forest by a white woman. Her name was Amy Denver, and she was also an escaping indentured maid. Amy acts as a midwife in a birth and gives her name to the baby born. Amy rubs Sethe's feet and wraps Sethe's baby in her undergarment. Although Amy's care for Sethe, taking care of Sethe's body, reverses the paradigm of women's interracial relationships, she did so not out of obligation or guilt but out of a sense of shared circumstance and suffering. Why did they collaborate in a tragic situation? Because they were bounded by their gender, their poverty, and their hard life experiences. She repeatedly states that she cannot risk being caught with a runaway slave, but instead leads Sethe to a shack and bandages the wound on her back as best she can. Actually they shared a privileged moment of connection in the forest: "privileged" because they were allowed to have a space separated from any social framework. Sethe and Amy could at least talk for a few brief hours, from late in the afternoon to the next early morning.

Morrison's philosophy regarding "race" and "racism" may be well expressed in the novel of *Beloved*; she says, "Race is the least important piece of information we have about another person. Forcing people to react racially to another person is to miss the whole point of humanity." ("Timehost Chat") Sethe certainly tried to open the door of "race" to establish a meaningful interracial relationship between a white and a black woman.

Keywords: race, racism, slavery, humanity

* 電子情報工学科 教授 (Department of Information and Electric Engineering, Professor)

1 黒人のいないアメリカ

トニ・モリスンは『タイム誌』とのインタビューで、もし黒人がこの国にいなかったらアメリカにやってくる移民たちはそれぞれの国に分かれて互いに相反目し弱小国同士の争いとなっていたらという。だが黒人の存在が彼らに争いをやめさせた。どの移民たちも自分たちには黒人という軽蔑の対象がいるのだと安堵した。だから最後の一线で踏みとどまり国家としての団結を保ちえたのだと。だれも自分たちが一番下層の階級だとは思わずにすんだ。なぜならわれわれの下には黒人がいる、と常に思うことができたのだから、と語っている。

歴史をひもとくまでもなくアメリカの社会は黒人との深い関りの上に成り立っている。国家社会だけでなく、文化や文学もその例外ではない。ただ黒人文学がアメリカ文学のキャンノンに組み込まれたのはごく最近のことだ。それまではアメリカ文学と言えば白人の、しかも男性の文学であったし、アメリカ人と言えば特別な状況を除いてそれは白人であった。「アメリカ合衆国の有力な文芸批評家のなかには、どんなものでもアフリカ系アメリカ人のテキストは決して読まず、またそう明言するのを誇りにしている人がいる。・・・アメリカ文学にたいする批評眼をもった裁き手たちが、アフリカ系アメリカ人のテキストにたいする無知を喜びとし、事実、それを楽しんでいるように見えるのは興味深い現象ではあるが、驚くには当たらない。」⁽¹⁾とモリスンは述べている。

黒人文学に対して無知な文学批評眼しか持たないアメリカのこのような文芸評論家たちに冷水を浴びせたのが、1993年のモリスン、ノーベル文学賞受賞のニュースだろう。ノーベル文学賞選考委員会がその選考理由としてあげているのは、モリスン文学に対する高い評価である。それは「幻想的、かつ詩的な手法により、その作品はアメリカ社会の現実の姿を真正面からえぐりだしている」⁽²⁾と讃えている。トゥルーダー・ハリスはモリスンの作品を評して「(モリスンは)ことばからその本質だけを残し、言葉本来の力を引き出している。過度な形容詞や副詞は排除し、モリスンが言うような、いわゆる「穴」や「空間」を残す。そこに読者が入り込んで、自分の感情や色彩を施すことができる」⁽³⁾そんな作品であると。

むろんこの賞は一人モリスンに与えられた賞ではない。このときすでにきら星のごとく黒人女性作家がそれぞれの傑作を携えて登場していた。マヤ・アンジェロー、アリス・ウォーカー、ニッキ・ジョヴァニー、ゾラ・ニール・ハーストン、グロイア・ネーラーなど枚挙にいとまもない。これまでのアメリカ文学キャンノンには黒人文学は加えられていなかった。その不完全さを修正するために、これまで試みられたことのない新しい文学の批評地図を描こうとしたのはモリスンである。アメリカ文学に黒人文学が含まれてこそ将来の展望も明るさを増すことだろう。しかもそれは正当な理由がある。モリスンのこの主張は大方の評論家の認めるところとなっている。さてモリスンが世に問うてきたさくひんは一体どのような作品であるか、また彼女の文学的信念はいかなるものであるだろうか。

近年この点に関して読書界の関心は高く、モリスン文学の研究は盛んになってきたと言える。たとえば「トニ・モリスン・ソサイアター」が「アメリカン・リタルチャー・アソシエーション」の有力な構成メンバーになっているのもこの査証であろうし、また当然の成り行きでもあろう。

黒人であり、女であるという差別、この二重の差別を味わってきたモリスンがアメリカ社会における黒人たちが抱える問題や苦悩をその作品に表出していないはずはない。ノーベル文学賞授賞後に発表した『パラダイス』は、その冒頭に「彼等はまず白人の女を撃つ」というショッキングな文で始まっている。これを取り上げて一人の記者があれば人種問題に関するなにか特別な意図があるのかとモリスンに尋ねた。しかしモリスンは、あれはわざと書いたものであり、読者がこの作品を読んで人種（差別）問題はさほど大袈裟に考える問題ではないことを知って欲しかったと言っている。⁽⁴⁾ だとしたらアメリカ社会でレーシズムが引き起こしている多くの問題は看過してもかまわないということになるのだろうか。むろんその答えは「ノー」である。モリスンは黒人女性作家として自分の責務はなんであるかを人一倍自覚している作家ではないだろうか。『青い眼が欲しい』を始めとして『スーラ』、『ソロモンの歌』、『ターベイビー』、『ピラヴド』、『ジャズ』、そして『パラダイス』と発表してきた彼女の文学上の姿勢は一貫して見える。それは彼女のどの作品も見ても登場人物はすべて黒人、背景はすべて黒人社会であり、白人や白人社会が描かれることはない。モリスンがなぜ黒人と黒人社会に拘りつづけるのかについては、いろいろと見解があるだろうが、わたしはただひとつだけ申し上げておきたい。それは彼女こそ、アメリカという国において、黒人の過去を、またその歴史を、だれよりも真剣に見つめて、それを悲しみ、嫌悪し、恐れ、そして愛した作家はいないということである。大袈裟に言うなら、彼女こそ黒人奴隷の過去と歴史を丸ごと背負い込んだ作家であり、同胞黒人の「人間再生」を希求してやまない作家であるとわたしは思う。

モリスンのレーシズムに対する考えはアメリカ黒人の抱くそれと大きく異なることはないと思う。ただ「人種問題はさほど大袈裟に取り上げて」論ずる必要はないという彼女の発言は注意して受け止める必要があるだろう。「時間」が、それも短期間のうちにひとりの作家の歴史観に劇的な影響を及ぼすことがあるとすれば、彼女のこの発言はいささか注目されてよいものであろう。確かに『パラダイス』は彼女の7作目の作品であり、処女作『青い眼が欲しい』の出版から10年以上経過していることになるのだが、作家としてモリスンはこの時点で人種や皮膚の色の違いに拘泥せず、いやそうした即物的な視野を超越して真の人間の姿に迫ろうとする次元の高い文学的スタンスに立つようになったのだろうか。しかし『ピラヴド』の主人公たちは白人への拭い難い不信をあらわにして、現状を悲観しているのではないか。現実においてもアメリカ社会の人種差別の嵐は止むことはないようだ。従ってモリスンの人種問題についての発言が直ちにモリスンの転身を語っているとは断じ難いのである。それはやはり早計だろう。ただそうしたより広い世界観を持って黒人の社会を描くことができるほど作家としての自信と強い信念を抱くに至ったのであるなら、モ

リスン文学の展望はさらに明るいもになったといえる。

一作ごとに常に野心的な技法と新しい試みを駆使して、黒人の人間性を力強く描いているのもその現われだ。モリスンの同胞黒人の「人間復活」の願いは彼女の創作活動を根底から支えているのだから。またその底流にはいつも人間が人間である証としての“愛”が語られている。黒人がレーシズムに打ち負かされずに、自らの人間復興を成し遂げるには愛こそ必要な力であり、同時に暗い過去の道のりを明るく照らすトーチになることだろう。賛否の別はさて置いて、「愛」を語るモリスンの姿勢こそまさにモリスン文学の原点ではないだろうか。彼女自身が言っているように、どの作品もみな“愛”の千変万化の姿を描いているが、これこそ彼女が追いかけてきたテーマであった。モリスンの世界観の首座を占めるのは「愛」である。「愛」は人間らしさの証であり、奴隷にさせられた黒人の人間復権を果たす力である。

しかしモリスンはただ「愛」であればどんな「愛」でもわれわれを幸福にしてくれるというものでないことも十分知っている。なぜなら「愛」という仮面に隠れた行為が、自分はこの世で一番いいことをしたのだと思い込んでいても、実は一番恐ろしいことを行ってしまうこともあるからだ。人間の愛はまさに千変万化なのかもしれない。彼女の作品はどれもみなこうした「愛」の行為が「悪」だったり、「善」だったり、「犯罪」であったりもする姿を描いている。「愛」なるものの究極の正体はだれにも分からないのかもしれない。

本論で取り上げる『ピラウド』においては、ヒロイン、セスが愛ゆえにわが子の命を奪うという、幼児殺しの事件が描かれている。むろんその行為自体、否定しがたい犯罪であるが、これが真の母の「愛」から生まれ出た行為であり、それもとてつもない大きな「愛」から湧き出でてきた衝動だったとしたら、事は簡単ではなさそうだ。しかしなぜ最愛の我が子を、しかも生まれて幾月も経ていない赤子を、自らの手にかけたのだろうかという疑問は残る。セスは告白するようにその心中を述べている。「白人はおまえの命を奪うんだよ。働かせるだけじゃない、殺すんだ、片輪にしてしまうんだ、そして何よりもおまえを汚してしまうんだ。あまりにもひどく汚されたおまえは自分が好きになれない。自分が誰であるかさえ忘れてしまう。考え出せないんだよ。それでもみんな生きながらえてきたのだが、おまえにだけはそんな目に遭わせたくなかったのだ」⁽⁵⁾(251)と。人間として認めてもらえない「奴隷」を生きることの苦しみをせめて愛するわが子にだけは味わせたくないという母の愛が正気を逸したこの犯罪を犯させたのだという。黒人であることが、奴隷であることが、全ての人間らしさを奪い去り、愛をも奪ったのである。無論この作品のアンダートーンには奴隷制度への激しい怒りが大河のごとく流れている。そして白人社会のレーシズムに対する怨念はこの事件を覆い包んで消えることはないだろう。

2 「スウィート・ホーム」崩壊と白人不信

奴隷農場「スウィート・ホーム」を所有するガーナー氏は言う。「うちの奴隷はみな男だ」と。奴隷ではなく男として育てたというガーナー氏はほかの奴隷農園では見ら

れない自由を与えていた。その違いが大きいほど奴隷制度の矛盾がより明確に見えてくるのであろう。この農園にセスという女奴隷がやってきた。やがて彼女はハーレーと結婚することを許された。だがセスには祝福する何もなかった。するとガーナー夫人がイヤリングを与えて、セスを祝福してくれたのだった。「このイヤリングを上げますよ。ハーレーと幸せになってくださいね」と。セスは奴隷であるわが身を忘れて喜んだ。そしてこのリアン夫人のためなら実の母以上に献身的に仕えようと思うのだった。「わたしはわたしの母に尽くしただろう以上に奥様には尽くしました。もし母が病で倒れ、わたしを必要とするときがあったとしたら、きっと最後まで看病したでしょうが、わたしは奥様にはそれ以上の献身的な看護をしたいのです」と。事実ハーレーの母ベビー・サグズは捨て値同然で売りに出されたとき、ガーナー氏が子どものハーレー共々一緒に買い取ってくれたのである。サグズにとってもガーナー夫妻は命の恩人だった。献身的に仕えるサグズもやがて年老いて、セスが代わって仕えているの。セスはこれまで抱いてきた白人に対する不信感や恐怖心がガーナー夫人に対しては抱くことが出来なくなっていた。事実体の不自由なサグズがころんで卵を壊した時も農園のだれひとりとして「このノロマのニガー女め、何をしているんだ」と怒鳴ったり、殴ったりは決してしなかった。これがよその農園だったら目を背けたくなるほどの罰が与えられて当然だった。こんな奴隷農園は南部のどこにもなかった。むしろ作者モリスンはそのような奴隷農園の存在を確信していたわけではない。むしろモリスンは現実とはかけ離れた奴隷農園を描くことで、痛烈な奴隷制度の批判をしているのだ。どんなにやさしく扱われても、所詮は奴隷、彼らの命は白人に握られていることに変わりはないのだから。ほかの奴隷農園で酷使のあまり命を落とした奴隷の話さえ聞かされていた。サグズは言う。「どここの家に行っても、死んだニグロの嘆き名天井の垂木に届くほど詰まっていない家なんか、この国には一軒だってありやしない。」(14)と。奴隷制度の上に成り立っている南部の農園はどこも同じ、奴隷の暮らしは地獄であった。だが「スウィート・ホーム農園」は別世界だった。ところが、理想主義者のガーナー氏が急逝するとリアン夫人は甥の「先生」を迎えた。それはスウィート・ホーム農園の崩壊を意味していた。あれほどの自由を享受していた男たちは「先生」により徹底的に「奴隷農園」の現実を味わさせられたのである。病床に臥したリアン夫人は黒人たちに優しい言葉ひとつかけられずに、ただ涙ぐむだけであった。いかに南部の女性たちが男の力量に頼っているか、白人女性が黒人たちに振りかざす特権もあくまで夫の社会的地位があつてのことなのである。かってガーナー夫人はサグズにもだれにも優しくあつた。しかし所詮奴隷は奴隷であり、やりくり困れば奴隷は売られていく。奴隷は主人にとっては道具であり、物でしかないのだから。しかし夫人の優しさを知ったセスは「リアン様はほかの白人とは違う」と言うのだが、ハーレーは「白人がおまえの全人生を掌握していることはどこも同じだ」と奴隷農園の本質を見抜いていた。

「先生」が来てから「スウィート・ホーム農園」は地獄と化した。そして奴隷州南

部はどこに行ってもレーシズムの嵐が猛り狂っていた。「白人は堂々とした放題をしていた。町ぐるみでニグロを一掃したところが何ヶ所もあった。ケンタッキー州だけでも一年に87件のリンチが行われた。・・・黒人の女性は秘密結社のメンバーに強姦された。財産は奪われ、首はへし折られた。ひふの焼ける臭いと、リンチの火にあぶられて燃え滾る血の臭いとはまったく違っていた。異臭が胸をむかつかせた。・・・それは目撃者の口から、手から手に届けられる手紙に刻み込まれるように書いた文字から立ち上った。」(89)セスが命がけの逃亡を試みたのもそんなときだった。しかもサグズと再会できたとはまさに奇跡であった。

セスが乳飲み子を抱いてサグズの家にとどりついたのもまた奇跡だった。しかし幸せなひと時はあっという間に吹き飛んでいってしまった。息子のハーレが買い取ってくれた「自由奴隷」の身分をサグズが神に返さなければならないときが来た。最後にサグズはセスに言った。「白人らはわたしの全てを奪い取った。人間の心まで壊してくれた。

白人ほど不幸をもたらすものはこの世にはない」と。
サグズの言葉もまた白人不信に満ちていた。



3 「人種」の扉を開けた奴隷女セス

セスは森に隠れ、逃亡生活に耐えていた。身重の女には飢えと寒さは生きる力さえ奪えかねない。そのときひとりの白人女がセスを救ってくれたのである。

トニ・モリスン

—— シンシナター・オペラ劇場にて

(2005)

見たこともないようなボロをまとった白人の女が現れると、「おやまあ、クロンボがいる。たまげたねえ」と言った。そしてセスのみずぼらしい逃亡姿を見ながら、「おまえさんときたら、あたいがいままでにおめにかかったものの中で、いちばんオッカナイすがたをしているよ。こんな山ん中で何していんのさ？」と尋ねた。

「逃げています」とセスは言ってしまった。そして隠し切れずに「わたし 赤ん坊を生みそうなんです。おじょうさんはこんな森の中を歩くなんて、どんな用があるんです？」と聞いた。

この白人女はエイミ・デンヴァーと名乗った。セスに対して殊更白人女の威厳を引きらかす態度はしなかったが、セスを見下ろして言った。

「ちょいとおまえ、誰に向かって口を利いているんだい、気つけな。お前なんかより、用は大ありさ。やつらはおまえを引っ捕らえて、首をちょん切るだろうよ。

でも、あたえを追っかけているものはだれもないさ。やつらはおまえさんを追っかけているのだ。あたえは知っているんだよ。」

言われるまでもなく、セスの姿を見たら、だれだって逃亡中の奴隷女だと容易に察しがついただろう。

エイミは奴隷女の足の裏をぎゅっと押した。

「そりゃ、誰の子だい？」

セスは答えなかった。

「自分でわからないんだね。イエスさま、助けてくれよ。」そう言いながら

エイミはため息をつき、頭を振った。

「痛むかい？」

少し間をおいてセスが言った。

「背中が痛いんです」

「背中がかい？ おいおい、おまえは目も当てられないポンコツだ。ほれ、こっちを向いて、見せてみろ」

エイミはドレスの後ろを開けて、そこにあるものを見ると、「助けに来てくれよ、イエスさま」といった。

そして彼女はセスの背中にあるものを見たまま教えてやるのだった。それは赤いスイカをぱかっと割ったみたいで、汁がいっぱいたまっている・・・ひどいムチ打ちの痕だった。背中いっぱいの傷跡はまるで枝も葉もある木のようにも見えた。「神様何を考えているのかね、考えてしまうよ」とエイミは呟きながら、傷の手当てをしてくれた。そしてセスに前のところにいたほうがよかったかもしれないねと言った。手当てを済ませるとエイミは身の上話を始めた。自分はボストンに行くんだ、そしてベルベットを買うんだと。借財の形に売られて母親がケッタキーに来たときの事、その雇い主パデーさんのこと、彼が自分の父親だと教えられたが、エイミは信じないと言った。そして今夜一晩この痛みを耐えて生き延びられれば、ずっと生き延びれるよとセスに言う。

近くの川にボートを見つけ、二人はそこで体を休めた。だがその晩陣痛がセスを襲う。弓なりになって苦痛に耐えるセスを見てエイミは狼狽する。「何でそんなかっこうしているんだよ、あんたアホとちがうか？ そんな真似すぐやめろ、ヤメロってば。おまえ世界一のウスノロだ、ルウー、ルウー」しかし破水が襲い、エイミは無我夢中でセスを介抱した。セスの赤ん坊は無事に生まれてきた。奇跡だと思った。

そして東の空がほんの少し白くなったとき、エイミは立ち上がり、こう言った。

「この子はあたいのことを知ることはないだろうな。おまえ、この子に教えてやるかい？ だれがこの子をこの世に連れ出したかをさ」突ったままのセスの胸には、ボロにくるまれ、くくりつけられている赤ん坊がいた。

「教えてやんなよ。いいかい？ それはミス・エイミ・デンヴァーだってね。ボストンのね」(167)

たとえ、借財の形^{かた}に売られた人間であっても、自分を「ミス・デンヴァー」と名乗ってみせたエミイは白人としての誇りがあったのだろう。しかしこの森の中にいる限り、白人だの、黒人だのと言ったところでなんの意味もなかった。エミイは人間としてひとりの女の命を救ったのだ。少なくともレーシズムを忘れた、女たちの一瞬であった。

エミイは夜が明けないうちに出て行った。一人になったセスは（これは深くなるなあ）と思いながら、自分が眠りに落ちていくのを感じた。眠りの淵で、深みに落ちていく寸前に、セスは思う。（きれいな名前だ。デンヴァー。ほんとにきれい・・・）（167）

しかし、作者モリスンの描く異人種間の友情が仮に存在したとしても、白人女のエイミが黒人女のセスを介護するというのはこれまでの概念をまったく逆にした構図である。つまり白人と黒人との関係をひっくり返して描いていることになる。作者モリスンはなぜここまで踏み込んで人種問題に挑んだのだろうか。たしかにモリスンの世界では読者にレーシズムが引き起こす理不尽な差別や苦痛を感じさせない品格がある。実に不思議な気がする。自身の両親も元奴隷だったし、レーシズムが黒人の心をどんなに歪んだものにしてきたか、社会がどんな残酷な人種差別を押し付けてきたかモリスンは十分に知っているはずだろう。しかしモリスンは感情に走って怒りを露にする抵抗文学に陥ることは決してない。いわんやお涙ちょうだい式のソープ・オペラなど書くはずもない。モリスンは黒人を通して人間を見ているのだ。そこには万華鏡の中を生きる人間の姿が映し出されているのである。

モリスンの短編『レシタテフ』（1983）は「人種」というラベルを剥ぎ取って二人の少女を描いたいささか実験的な作品である。物語は少女ロバータとトワイラの出逢いで始まる。そこは女子寄宿舎で、同室になったロバータを見てトワイラは驚くのである。「それはまるで見知らぬ場所でまったく別世界からやってきた少女に出会ったようなものであった。私はおなかの具合が悪くなってしまった」と。異人種間の出会いがどんなに驚きであったか、またどんなに忌み嫌うことだったのか、ストレートに表現しているのである。だが、作者はどちらの少女が白人なのか、あるいは黒人なのか、決して知らせることなく物語を進めていく。成長して二人は再会するのだが、読者は二人の女の生き様を知って強く感銘を受けることになる。そしてはやどっちが白人なのか、黒人なのか、どうでもよいと思うのである。人種にこだわる愚かさを読者は痛感させられて物語は終わる。

モリスンにとっては人種という情報は確かにひとつの情報にはなるが、それがその人間のすべの情報ではないのである。つまりその人間の性格、人柄、社会的地位、文化的品性、能力、宗教的信仰、などなどその人の総体を示す特性の一つにすぎないからだ。たとえば『パラダイス』冒頭の文は、「彼らはまず白人の女を撃つ。後はゆっくりと始末すればいいのだから。」とある。これはいかにもプロヴォカテヴは表現だ。だが作者モリスンは敢えてこの表現を使うことで、人種に対する読者の認識と理解を試しているのではないかとわ

たしは思う。黒人の町ルビーからやってきた男たちは修道院の住人たる女たちを襲うのだが、彼らにはまたそれなりの動機があったとはいえ、それは偏狭なレーシズムであることはすぐに読み取れる。黒人の側からのレーシズムが男たちを動かしていたのだ。しかし物語では結局は7人の女たちのだれ一人として白人か、黒人が、確たる証拠を残さずに消えていく。人種にこだわった読者は完全に肩透かしを食らい、その無意味さをかみ締めるだけだ。モリスンはレーシズムという概念を超えた、人間性の気高さに視点をおく文学を志していることは間違いないと考える。

4 異人種共生の夢

『ピラヴド』のエイミとセスの友情はいささか現実離れした、あまりにもフェクシオンの筋立てではあるが、そう願う心は誰にでもあるのではないだろうか。だがトゥルデアー・ハリスは二人の出会いについて、ありうる話ではないとその現実性に疑問を投げかけている。「セスの物語は同じ黒人なら充分承知している白人と黒人の関係をまったく無視している。実際の話ならエイミがセスを保安官にでも突き出すところだろう」と。だとしたらなぜエイミがセスの体を気遣い、傷の手当てまでして助けてくれたのか、それは白人が黒人に対する（これまでの行為の）罪の意識からだろうか、あるいは黒人に対する哀れみの情からだろうか、と思うのだが、状況からして、そのいずれもありえないことがすぐ気づく。それは二人に共通する苦境がエイミを動かしたのだ。それであればこそ互いに理解が出来たのである。つまり二人は女であり、貧しく、食べるものもなく、その命は他人に掌握されているひ弱な小さな生き物にすぎなかったのだ。しかも生殺与奪の権利を持つ二人の主人はいずれ劣らぬ冷酷非情な男だったと二人は打ち明けることができた。母親もいない、帰る家もない、いつ捕まえられるかと不安にせかされて逃亡を続けているのである。この二人にしかし格別の運が味方していた。それはそのような過酷な社会から二人は完全に隔離されていたのである。人里離れた深い森の中で遭遇した彼女たちには少なくとも社会との繋がりも忘れて、人間として共に過ごす二人きりの幸運があった。たとえそれが数時間という短い夢であったとしても。

セスにとってはエイミとの出会いが異人種間の人間同士の心の交流を初めて経験させてくれたのであり、この機会にめぐまれたことはセスを大きく変えたことだろう。ほかの場所ではこれは決してありえないことだった。白人と黒人が人として語り合う、いや助け合うなどは、人種にこだわるこの社会では全くありえないことだから。セスは思う。リリアン夫人はほかの白人とは違う、エイミは黒人のわたしを介護してくれたと。このことはセスも素直に認めようとしたにちがいない。またそう思えるように状況が見方してくれた。あの逃亡という極限状態に置かれた彼女にとっては白人だの、黒人だのという人種へのこだわりは実際何の役にも立たなかったからだ。ジョーンズ夫人も、ボドウエン氏も黒人社会の為に命を賭けてくれたのではないかと感謝の気持ちさえ抱くこ

とができたのだ。ただ他の黒人たちが白人に対して拭いがたい怒りと不信の念を抱いていることもまた事実である。黒人奴隷に対するこれまでの白人の残忍な扱いや裏切りはそう簡単には消えることはないだろう。現に社会には黒人と白人の差別が依然存在している。だれの心にもレーシズムが棲み付いている。悲観的になる材料があまりにも多すぎるのだ。それでもセスは思う。なぜ異人種間の心の交流は実現できないのだろうか。もし白人と黒人を差別しているものが人種という扉なら、その扉を開けたらいい。しかしその扉を開くことはすざまじい勇気が必要であろう。白人にも、黒人にも関与したくない問題だ。

作者モリスンはここで敢えて薄幸なヒロイン、セスにその白羽の矢をあてたのである。セスにその扉を開かせようと。これはまさに実験的作品と言わざるをいない。もしセスがこの扉を開いてくれるなら、いや少しでも動かしてくれるなら、異人種共生の夢が開くのではないだろうか。モリスンは読者にそう語りかけているようだ。レーシズムを乗り越えて、パラダイスを描こうではないかと。この作品はその夢を見据えた実験であり、希望の物語だと解釈したい。

(了)

----- 注 -----

(1) トニ・モリスン『白さと想像力』 アメリカ文学の黒人像、大社 淑子訳、朝日選書499、p144.

(2) 朝日新聞(平成5年10月8日) モリスンのノーベル文学賞受賞の記事 参照

(3) Trudier Harris. "The World That Toni Morrison Made", *The Georgia Review*, Spring 1995.p324.

(4) "Timehost Chat": transcription from TIME Jan.21,1998.

『パラダイス』の冒頭「まず白人の女を撃つ。・・・」という文に人種問題に敏感な読者の関心が集まるのも当然だろう。だが、モリスン次のような言う。

"I did that on purpose," Morrison says. "I wanted the readers to wonder about the race of those girls until those readers understood that their race didn't matter. I wanted to dissuade people from reading literature in that way." And she adds: "Race is the least reliable information you can have about someone. It's real information, but it tells you next to nothing."

... from *Paradise Found*, on Internet.

(5) トニ・モリスン『ピラブド』(上)(下) 吉田迪子訳、集英社、1990. カッコ内の数字はページ数を示す)